

解答

- 一 a 厚 b 刻 c 沿 d 期
- 二 1 父親と話し合う間、少年の面倒をみられないという理由で母親が兄夫婦にしばらくあずけることにした。
2 すでに母親にはほうっておかれていたのだおろきも、落胆もなく、進んで受け入れようと思っていた。
三 意外にも足にびたりと合って歩きやすそうな靴の感触がうれしく、自然と緊張がゆるんだから。
四 ア
五 ぶつきらぼうでとっつきにくい感じを抱いていたが、たがになれるにしたがって会話がかみあうようになったことで、親しみを感じ始めている。
六 1 しめった草木のにおいやぬかるみは都会育ちの少年にとってはめずらしく、存分に楽しんでいたから。
2 都会育ちの少年が心配だが、楽しんでいるようなので、危険でないかぎり好きにさせてやろうと思っている。
七 ウ
八 1 力を合わせて穴を掘った二人が同じように腹を空かせ、同じようにおにぎりを味わっていること。
2 おじさんの言うとおり、たくさん体を動かした後に食べるおにぎりは、母親が買ってくるべきあいものとは比べものにならないほどおいしかったから。
九 イ
十 ウ
十一 もともと疎遠だったので、少年には不慣れな大人の男の人と接する緊張、おじさんには、都会の子どもを扱う戸惑いがあった。しかし、少年の工作のために、二人で山登りをし木の根っこを掘り起こしたことを通じて、少年は山と親しみ、山を楽しみ、同時に山に精通したおじさんに親しみと敬意を感じ、おじさんも少年を近しく感じるようになった。
十二 少年のはいている靴は年の大きくなれたおじさんの妹、つまり少年の母親が少年と同じくらいの年だったころにはいていたものだろう。おじさんは学校の工作の宿題が終わらずに泣いていた妹と少年を重ね、少年を放っておけない思いにとらわれたのではないか。

解説

- 二 1 場面の展開を把握します。冒頭の部分では少年とおじさんが山歩きに出かけることしかわかりません。事情が明らかになるのは「夏休みに入ってから……」で始まる80行め以降。「どうしてもお父さんと話し合わなければならぬことがあるから」（80行め）という理由で少年は「兄夫婦にあずけ」（80行め）られました。
- 2 「いそがしいからなんて言い訳をぜったいしないひとだった」（84・85行め）母親は、「働きに出るようになって」（84行め）からというもの、「少しずつ変わって」（84行め）いきました。「息子のほうを向くようになっっていた」（85行め）母親に、「十日ぐらいく世話になるからね」（85・86行め）と言われても、既に放っておかれることになっていたのであろう少年は「おどろきはしなかったし、落胆もしなかった」（86・87行め）。むしろ「それで家の問題が片づくならなんでもしよう」（87行め）と、自ら進んでおじさんの家に行ったことがうかがえます。
- 三 少年が自分でも気づかないうちに「笑みをうかべていた」直接の理由は、足に「びたりと吸いついた」（47行め）靴の感触の良さにありそうです。「めったに会わない」（13行め）おじさんを前に「緊張」（13行め）していた少年は「小さな失敗」（13行め）を繰り返していました。「ふだん会っていないとく応対に苦労」（15行め）するため、知らず知らずのうちに気疲れしていたのでしょう。そんなとき、「手で持つと重いのに」（47行め）「実際にく軽い」（47・48行め）靴の意外な感触は心地よいものであり、強張っていた少年の心を自然とリラックスさせました。
- 四 都会暮らしの少年はどうやらひ弱なようです。いくら重いとはいえ、靴を持ったぐらいで「身体がぐらりとよろめく」（11行め）のを見れば、おじさんでなくとも驚き呆れて咳きこんでしまうでしょう。これから山歩きに出かけるというのにこれでは先が思いやられますが、フィットした（ぴったり合った）靴の感触を楽しむかのような笑みを見せた少年を見て、おじさんはひとまず安堵の表情を浮かべています（へ↓ア）。
- 五 「めったに会わない」（13行め）ので「しゃべり方のくせがうまくつかめな」（15行め）い少年の戸惑いを知ってか知らずか、おじさんに少年を気遣う様子はありません。「車を使うのはく山歩きになる」（1行め）、「だったら靴だけでも変えろ」（3行め）、「そいつをはいていけ」（18行め）と、おじさんは必要最小限のことを少年に向かって命令す

る口調で一方向的に告げるだけです。ぶっきらぼうで話しづらいおじさんに対してなかなか上手に受け答えができずにいた少年でしたが、少しずつ会話が噛み合い始めます。山火事にならないよう用心するおじさんに対して、少年は雨が降ったあとだから心配ないのではないかと疑問を抱きます。少年がただボーッとしているだけでなく、ちゃんと状況を観察していることに「感心した」(67行め)のか、おじさんは「そうだな」(68行め)と初めて少年の言うことを認めてくれました。「うん」「なにが、うん、だ?」「うんって、返事しただけ」「そうか」(70・73行め)のやり取りは互いに呼吸が合ってきた様子を示しています。互いに口数は少ないけれど、気持ちは通じ始めたことで、少年はおじさんとの心の距離を近づけています。

六 「ぬかるみ」(11行め)を歩くという、ただそれだけのことでも、「都會育ちの少年」(11行め)にとっては新鮮な体験でした。「草木のかおりがゝものもあつた」(14行め)が「そういう複雑なゝのぼっていく」(14・15行め)ことを楽しんでいます(→)。そんな少年をおじさんは時に「だいじょうぶか」と声をかけ、「五分に一度はふり向いて姿を確認」しますが、基本的には少年の好きにさせています。おじさんはつかず離れず、ほどの距離を保って少年を温かく見守っています(→2)。

七・八 二人はほどよい大きさの「アカメガシ」(32行め)の切り株を掘り起こしにかかります。「たよりなげな」(33行め)見た目と違い、「根だけは中型犬までなら簡単に包めそうなくらいがっしりと張っている」(33・34行め)アカメガシを掘るのは簡単ではありませんでしたが、おじさんは「軽快で力強い穴掘りのわざ」(44行め)でどんどん掘り進めます。手際の良い作業ぶりに舌を巻きながら、少年も自分にできることをせつせと行い、いつしか「ふたりとも、なにもしゃべらずひたすら」(43・44行め)作業に没頭していきます。手強い切り株を力を合わせて掘り起こすという共同作業を通じて二人の心はさらに距離を縮めていきます(→7・ウ)。そのことは昼食の様子にも表れます。おにぎりをほおばった少年の歯にも、おじさんの歯にも、同じようにのりがくっついてるし、(この場面には描かれていませんが)二人は大きさこそ違うものの同じ型の靴を履いている。知らない人が見たら親子に見えたかもしれないほど、二人は近しい関係になっています(→ハ)。それにしても労働のあとのおにぎりの味は格別です。「腹が減つてればなんだってうまいもんだ」(61行め)というおじさんのことばどおり、大好きなツナのおにぎりがないことなど一向に気にならないほどのおいしさだったでしょう(→ハ2)。

九・十 少年はおじさんのところに預けられることを淡々と受け入れているようでした(問2)が、「母さん」ということばを聞いて飛び起きた様子からは、やはり母親のことが気になっていたことがうかがえます。父親が家から出ていき、母親が働き始めてから、少年の生活は一変しました。おそらくは家族三人で仲良く暮らしていた家で、少年は一人で過ごす時間が増えた。預けられることすら黙って受け入れる少年でしたが、母親にふり向いてもらえないさびしさは、たとえば「夏の工作だけはまだなにをつくるかすら考えていな」(89行め)いことを相談する相手がいないというようなときに強く感じたことでしょう。ところが、母親もまた、自分と同じくらいの年のころに少年と同じような悩みを抱えていたらしい。偶然とはいえ、意外なところに母子のつながりを見出した少年は驚きを隠せません(→イ)。妹(母親)の思い出話を始めたおじさん自身もまた、偶然の一致に驚いていたことでしょう。年の頃は当時の妹とほぼ同じ。工作の宿題で困っているのも同じ。性別こそ違うものの、妹と甥が長い年月を超えて重なって見えたであろうことは想像に難くありません。おじさんは若いころ、年の離れた妹に注いだ優しい思いを、今度はその息子である少年に向けようとしています(→ウ)。

十一 これまで読んできた内容をもう一度確認しましょう。まず、問四・問五で考えた出会いの場面における二人のすれ違いについて押さえます。久しぶりに会った二人は互いに上手にコミュニケーションをとることができずに困惑します。しかし、しばらく一緒に過ごすうちに次第に打ち解け合い、二人で力を合わせて切り株を掘り起こす作業を通じて気持ちがびたりと重なるまでの過程を追いましょ。

十二 おじさんが少年を連れてきた場所は、当時まだ小学生だった妹(少年の母親)を連れてきたのと同じところでした。足もとの悪い山道を歩かなければならないので、それなりにしっかりと靴を履かないと危険です。「ビニールみたいにやわな」(3行め)靴を履いた少年をとがめたおじさんが、山に連れていく小学生の妹の靴に無関心であるはずはありません。自分と同じように丈夫な靴を買い与えて一緒に山に登った。その靴が今日まで捨てずにとっておかれたのでしょうか。両親の都合でかまってもみえず、自分たちのところにやってきた少年を、おばさん(おじさんの妻)は不憫に思っていたことでしょう。その少年に子どものころの母親の靴を履かせようという夫の考えに抵抗はあったようでしたが、その気持ちを何とか抑えて二人に協力しています。時を経て、妹の息子(少年)がその靴を履くことになったという偶然に驚きながら、おじさんは二人を重ね合わせて感慨深い思いを抱いています。